

# 平成25年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	津島市立藤浪中学校	氏名	山田 浩子
-----	-----------	----	-------

## 1. 印象に残る写真2点

### ●「できたよ！」



子ども文化センターにて。折り鶴は難しいかなと思ったのですが、全員折ることができました！折り紙を配ったときに、みんな手を合わせて「コープチャイライ（ありがとうございます）」と言ってくれ心が温まりました。

### ●「日本って？」



ルアンプラバンの市場にて。「日本から来ました。」と伝えると、「??」の表情。「日本って知ってる？」と聞くと、「知らない」。こんなときどうやって日本のことを伝えたらいいんだろう…と考えさせられました。

## 2. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

### （特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて）

「国際協力の現場を自分の目で見たい。」という一心でこの研修に臨んだ。国際協力に関心がありながらこれまで関わるができなかったこと、授業で国際理解教育を実践しようとしても旅行先で見たうわべの姿だけでは伝えきれないものがあると感じていたこと、この二点が大きな動機だった。ラオスでの研修中はいろいろな場所を訪問するたびに、「自分だったら、この状況でどんな風に行動できるだろうか。」と考えている自分がいた。また現場を見せていただいたり、ラオスの生活を知ったりするにつれて「これを早く日本の子どもたちに伝えたい。」という気持ちが次第に強くなっていくのを感じていた。実際に、どこからどのように話したら、私が見聞きしてきたことがうまく伝わるのだろうかというくらいのことを体験することができた。国際協力に対する、自分自身の考え方についてもかなり影響を受けた。これまでも子どもたちに世界の現状に目を向けて、

考え行動できるようなきっかけづくりをしたいという視点で授業を行ってきたが、今後、今回学んだことをふまえていろいろな取り組みを実践していきたい。

### 3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

#### （1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ラオスでは、人々の笑顔がとても印象的だった。みんな優しい微笑みをたたえて「サバイディー（こんにちは）」と挨拶をしてくれた。恥ずかしがり屋の人も多かったが、それでも必ず笑顔で迎えてくれたり、質問に答えてくれたりした。子どもたちも恥ずかしがり屋の子が多く、村で一緒に遊ぼうとすると照れて逃げていってしまう子がいたが、それでも私たちが帰ろうとすると後ろから追いかけてきて、笑顔で手を振ってくれた。そんな姿にとっても心が温まった。一番驚いたのは、病院を訪れたとき、入院患者さんが笑顔で「サバイディー」と返してくれたことである。少なからず心身が弱って人に興味本位で見られたくないだろうときに、そんな笑顔で迎えてくれるのか、と感動した。

ラオスの人たちの心の優しさも印象的だった。少数民族の村を訪れた際、法事を行っているにも関わらず、快く家の中まで見学させていただいた。ラオス人のガイドさんに「日本人は心の中で『嫌だな』と思っているが、口では『どうぞ。』と言うときがあるが、ラオスの人たちもそう思っているのではないか。」と聞いてみたが、「ラオス人はそんな風には思わない。心から言っている。」とのことだった。日本も海外から「誠実だ」と評価されることも多いが、人を心から信じるラオス人のような心と行動が、今後日本でも大切にされていってほしいと思う。

#### （2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ラオスで活躍する日本人がとても多いことに驚いた。村の人や子どもたちと信頼関係を結んで、生き生きと活動している姿は、とても輝いていた。外国の地で、母語が異なる相手に自分の考えを伝えることは難しく、新しいプロジェクトや活動となると更に難しい。今回私たちが出会った方たちは、言葉も生活もすっかりラオスに馴染んでいる方ばかりだったが、実際にはそうなるまでには大変な苦労があったのだと思う。しかし明確な目的を持って行動しながらも、ユーモアを交えて楽しく村の人や子どもたちと話す姿を見て、プロジェクトや活動を実行していくためには、単に知識や技術だけを身につけるだけでなく、地元の人たちと信頼関係を築き、絆を強めることが大切だと感じた。また、同じ目標に向かっていても自分のやり方やこだわりとラオスのやり方がぶつかるときがある。その中でどれだけ目標を持ちつつギャップを埋めていくかが大切になるのだと感じた。ラオスの様子を子どもたちに伝える際に、ぜひ私たちが出会ったラオスで活躍する日本人の方たちの姿を紹介したい。

#### （3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

環境と発展。日本がこれまでの反省から考えていかななくてはいけない問題を、ラオスも抱えているのだということを知った。もちろん環境（保全）も発展もその度合いは、日本とラオスとでは大きく異なる。日本では、高度経済成長を経た後の公害問題など歴史的背景や学校での環境学習により、身の回りの3R活動など大人から子どもまで地球環境を守ろうという意識は全体的に高いと考える。しかし目に見えて環境が良くなっているか

といえば、疑問が残る。ラオスでは、自分たちの（ゴミを分別せずに大量に捨てるなどの）行動がどう地球環境に影響するかわかっていないが、自分たちの暮らしと自然とが近い分、森林減少や環境汚染などを身近な問題として捉えている、とのことである。置かれている状況も目指す発展の姿も異なるが、同じ地球に住む人間として、環境と発展によるジレンマを考へて、持続可能な発展を目指していかなくてはならないのだと考へる。子ども文化センターで青少年活動を行っている神田さんは、このテーマで子どもたちによるミュージカルを計画して練習を重ねているとのことであった。私もぜひ学校の子どもたちに、地球規模で考へ、身近なところで行動できる力を身につけさせていきたいと思う。

#### 4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「良い!と思ったところ」

地元の方たちがしっかりと参加できるように事業が進められているとこと。いろいろな訪問先で JICA 専門家の方々が、「私たち日本人がやってしまうことは簡単だが、それでは意味がない。ラオスの人たちが続けてやってくれるようにしなければいけない。」と口々に話されていた。実際、地元の住民の方たちが積極的に参加して取り組んでいる姿が印象的だった。

「今後あるといいなと思う視点」

ラオスの学校環境について、各地方で連携が取れているといいと思った。学校の方針は社会主義国なので国が決めているし、村長や学校長の権威が強いので一人の教師の方針はなかなか出しにくいとのことだが、今回地方ごとにより違いを感じたので、JICA の事業として教育に関わることは同じ国の中で方向性を打ち出していくといいと思った。

#### 5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・パッキングは余裕を持ってすることをおすすめします。帰りに教材やおみやげをたくさん詰められるように、スペースも重量も余裕をたくさん作っておくことがコツです。
- ・女性は洗顔グッズなどがいろいろ必要になると思うのですが、使い切りタイプか小分けにして持っていくとよいです。私は前日にパッキングして時間がなくなり、スーツケースが大きいので「入れちゃえ」とそのまま入れてしまったため、重い重い…反省しました。
- ・教科書は持って行って良かったです。中学校の教科書なので内容的に難しいだろうな、小学校で子どもと触れあえないので出番がないかな、と持って行くことを迷ったのですが、子どもセンターで大人気。ものすごく重かった（重量オーバーで代わりに持ってもらった方にも迷惑をかけてしまいました）のですが、持って行って良かったと思いました。
- ・ラオス語は研修に行くまでにできるだけ知っておくといいです。「こんにちは」と「ありがとう」だけ覚えていったのですが、英語がほとんど通じないので、もっと勉強しておけばよかったなと思いました。ラオス語を少し話すだけでにっこりしてもらえるので、やっぱりコミュニケーションの一番の方法になると思います。

#### 6. その他全般を通じての感想・意見など

ガイドのポンさんと通訳のポーさん、そしてドライバーさんなど現地のとて面白い方たちに恵まれてこれ以上ないくらい楽しく充実した研修を過ごすことができました。話が上手な上にさりげない気配りをしてくださり、そしておいしい料理もたくさん紹介していただきました。研修の内容が充実していた以外に、こうした方たちの配慮のおかげで良い研修になったと思います。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

以上